

- 4 . まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。
 だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。
- 5 . しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。
 彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、
 彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。
- 6 . 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。
 しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

- 4 . まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。

~l bs'. WbybkmW afn' aWh Wye'xY !ke' surely, indeed
 l bs' (肉体精神的な) 痛み、悲しみ afn' yl kY n.m. sickness-- sickness, disease; of the suffering servant of Y; of rich man;
 Qal. Pf. bear a heavy load Qal. Pf. incurable disease; recover from sickness; metaph. ,
 lift, carry, take of distress of land; = wound, of violence in Jerusalem. (pg 318)

Surely he took up our infirmities and carried our sorrows,

だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。

`hNkmW ~yhi a/ hKeu [Yn' Wnbvx] WkraW
 hn[hkn' [gn' bvX' 私たち
 Pu. Hoph. Qal.Pass.Pt. Qal.Pf. think, account
 1. be afflicted, in discipline be smitten. touch, reach, strike
 by God. 1. = receive a blow (Judah , under fig. of man).
 2. be humbled by fasting. 2. be wounded. 3. be beaten. 4. be (fatally) smitten + vb. of dying; be killed, slain (c. l [; for).
 5. be attacked and captured, , of city.
 6. be smitten with disease (by God); abs., of Y's servant.
 7. be blighted, of plant (in fig.) (Ephr.), (heart, bf,[k'; both + vby). (pg 645)

yet we considered him stricken by God, smitten by him, and afflicted.

- 5 . しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。
 彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

Wytəʃme aKdm W[əPmi l l'xm aWhw
 !A[' akD' Pu.Pt. crush, [vP, Po`al. Pt. pierced, wounded
 iniquity, guilt broken in pieces transgression against God
 (of the moral nature) **punishment of iniquity**
chastening, correction

`Wl -aPræ AtrbæpW wyl ' [' Wmæl v. rs,Wn
 apr' Ni.Pf. stripe, blow iniquity, guilt 矯正, 更正, 罰, 懲らしめ
 be healed: -- stripe, blow, stroke, my blow, その結果としての punishment **discipline**(of the moral nature)
chastening, correction

But he was pierced for our transgressions, he was crushed for our iniquities;
 the punishment that brought us peace was upon him,
 and by his wounds we are healed.

- 6 . 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。
 しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

WynP' AKræ:l. vyai Wyl [i' !aCK; WlKu
 hrP' Qal.Pf. h [T' Qal.Pf. 羊
 turn toward physically, wander about
 ethically: be led astray

`WlKu!v[] tae AB [yGphi hwhw
 iniquity, guilt [g' HI.Pf.
 1. cause to light upon, c. acc. rei + b pers. 降らせる、止まらせる、降りかからせる
 2. cause one (acc.) to entreat , (b pers.). 懇願させる
 3. make entreaty,
 4. , make attack, assailant.

We all, like sheep, have gone astray, each of us has turned to his own way;
 and the LORD has laid on him the iniquity of us all.

説教

イザヤはおよそ紀元前八世紀に活躍した預言者でした。

イザヤ書 53 章は、

彼の時代から数えて

およそ 700 年後（今から約二千年前）に到来することになる人類の救い主イエスキリストの到来を予告したものです。

ちなみに、

「紀元前」のことを「BC」、「紀元後」のことを「AD」と呼びますが、

「BC」は「Before Christ（英語で『キリスト以前』の意味）」、

「AD」は「Anno Domini（ラテン語で『主の年に』の意味）」の略語です。

人類の救い主キリストの到来によって新たな時代が始まったことを昔の人はこう表現したのです。

この二千年前のキリスト来臨をイザヤはそれをさかのぼること約 700 年前に予言していたのです。

それでは、その人類の救い主を、イザヤはどのように描写しているのでしょうか。

まず、

「彼には、

私たちが見とれるような姿もなく、

輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない」（2 節後半）といます。

つまり、

体格は良くないし、

顔も見栄えしない、

堂々たる威厳もなく、

誰もそのようになりたいとは全然思わない、そういう人だと言うのです。

いや、それどころか、

もっとはっきり言えば、絶対にそうはなりたくない人物としてイザヤはこう描写します。

「彼はさげすまれ、

人々からのけ者にされ、

悲しみの人で病を知っていた。

人が顔をそむけるほどさげすまれ、

私たちも彼を尊ばなかった。」（3 節）

このように、イザヤは、救い主が、

人々から「見下され、軽蔑され、恥と見なされ」、「痛み、悲しみの人」で「病を知り」、

「人々からのけ者にされ」、さらにはあんな奴は忌まわしくて顔も見たくないと「彼から顔を背ける」ほど、

とにかく徹底的に軽蔑されると言います。

これはとても意外です。

私たちは、

人類の救い主と聞くと、

ついイケメンで、体格も立派で、堂々たる威厳に満ち、栄光に輝いて、

この地上のあらゆる民族、あらゆる国々の人々から慕われ、尊敬され、

みんなの憧れの的のような、まるで宮殿の王子様みたいに絵に描いたようなヒーローを思い描きます。

しかし、預言者イザヤが私たちに伝えてくれる救い主の姿はそれと全く正反対です。

風貌はささなく、不格好で、病気持ち、人々から人気が無いどころか、

人から忌み嫌われ、徹底的にのけ者にされて、いつも心に痛みがあり、悲しんでいると言うのです。

そして、誰も彼を救い主とは思わない、

これが救い主です。

イザヤが私たちに今も伝える人類の救い主の姿です。

救い主イエスキリストの生涯を一言で言い表せば、

それは「惨めな」、驚くほど「惨めな」、あらゆる意味で「惨めな」、

みすばらしく、風貌も、尊厳も、栄光も、健康も、何もない、話にならないほど「惨めな」、「呪われた」生涯です。

このように神に呪われた惨めな救い主の姿の、一体どこに私たちの希望があるのでしょうか。

この世でこの上なく最も呪われたキリストが一体どうやって私たち人類を救って下さるといのでしょうか。

どこにその力があるのでしょうか。

どこに希望があるのでしょうか。

それはこの一点にあります。

すなわち、

キリストがこの世で最も惨めな呪われた生涯を生きたのは他でもない「私たちのため」であったということです。

「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。...

彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。...

主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」(4-6)

このように、

キリストが受けた病、痛み、呪いは

すべて「私たち」のためであったということを、イザヤは何度も何度も繰り返し繰り返し強調します。

(ヘブル語旧約聖書の原文では「私たち」という言葉が4-6節までで実に九回も出て来ます)

4. まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。

だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。

イザヤは、

キリストが「私たちの」「病」と「痛み」を担い、

しかもそれはただの「病」と「痛み」ではない、

神の「罰」、「神に打たれ、苦しめられた」結果としての「病」であり「痛み」であると言います。

キリストは「病」と「痛み」を担ったが、

それは実は「私たちの」「病」と「痛み」であり、

同時に、罪に対する「罰」としての、「神に打たれ、苦しめられた」ことであると言うのです。

それで、こう結論づけます。

「彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。」(5節前半)

そして、これらを次のように要約するのです。

「彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」(5節後半)

それでは、私たちの罪とはいったい何でしょうか。

神に打たれ、罰せられる「罪」、「そむきの罪」とはどのようなことを意味するのでしょうか。

イザヤは言います。

6. 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。

しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。」(6節前半)

これが罪です。

「羊のようにさまよい、.....自分かってな道に向かって行く

(直訳は『人は、彼の道を行く』)」

これがイザヤの言う罪です。

神さまに忌み嫌われ、罰を受け、打たれる「罪」なのです。

「自分かってに、自分中心に、自分の道を行く」

それはイザヤが見る時、罪以外の何ものでもありません。

しかも、このことは私たち「みな」がそうなのであって、

しかも私たち「ひとりひとり、おのおの」、人間として生まれた以上、

例外なく、神さまを中心として生きるのではなくて、自分を中心にして生きている、とイザヤは厳しく告発するのです。

私自身の経験を申し上げます、
私自身は実は洗礼を受けてからもしばらく自分が罪人であるとは思っていませんでした。

でも、ある時、
「人間の本性は完全に墮落しきっていて、何一つ善を行うことができない」と指摘するある本を読んで目が開かれました。

そこにはこうもありました。
「たとえ表面的には人から賞賛されることをなすことができたとしても、
しかし、そんなものは天の法廷に於いては何の価値もない。」

これを読んだ時、
「ああなるほど、こういう罪なら自分は罪人だ」と私は自分が罪人であることをはっきりと悟ったのです。

私たちが普段罪と考えていることは「人前」に於ける罪のことです。
盗み、姦淫、人殺し、嘘つきなどは、すべて人に対して、です。

でも、神さまに対してはどうでしょうか。
私たちをこの世に造ってくださった神さまに対して、罪を犯していないでしょうか。
この世界を造り、支配し、審判される、きよい神さまに対して、私たちは何をしてきたでしょうか。

人に喜ばれるようなことはたくさんしてきたかも知れませんが。
でも、人を喜ばすような「良い」行いをした時に、私の心は何を思っていたでしょうか。
「やっぱり私はすばらしい。」と自分に栄光を帰して、
良い働きをさせてくださった神さまに感謝しなかったのではないのでしょうか。
もし、そうだとするならば、それはこの世で最も醜いことです。
最も汚れたことです。
神のものを盗む泥棒犯罪です。
それなら、良いことをしない方がまだ罪は軽いです。

つまり、こういうことです。
私たちは、人の目を欺く、表面的には「良い行い」をすることができます。
でも、それは神さまの前には
「良い」ことではないばかりか、
むしろ忌み嫌われることであり、
さらには神さまのせつかくの御恩をないがしろにする背信行為、反逆行為なのです。
私たちに一切のものを与えて良くしてくださった神さまに反旗を翻して、
神さまを敵に回して、神と戦う、自分を神とする行為です。

一見人目には良いことのように見えても、微妙にずれているんです。

その中心がずれています。

どんなに良いことをしても、それは神さまのためではなくて、自分のためです。

自分の利益、自分の名誉、自分のプライド、自分の栄光のためです。

中心がずれているので、何をやっても総崩れです。

そのズレとは何でしょうか。

どうズレているのでしょうか。

それは「神さま中心」ではなく「自分中心」ということです。

だから、何をやっても悉く罪となり、神の怒りを買ひ、神の呪いとさばきを受けることになるのです。

自分勝手に生きる本質は神への反逆です。

そして、その代償は神の呪いとさばきに他なりません。

宗教改革者カルヴァンはこの6節をこう解説しました。

「『おのおのはおのが道を行つた』とある。

これはすなわち、各々が自分のペースで歩いた時、
地獄へ行った、各々が滅亡に身を投げた、という意味なのだ。」

俺は勝手に生きるというのなら勝手に生きればいけれど、

しかし、その勝手に生きるということの本質は、自分を神となして神に反逆することであることを知らねばなりません。

そして、その代償は神の呪いとさばきに他ならないことも知らねばなりません。

そのように、自らを神のようにふるまって自分勝手に生きている人間たちに対して、神さまは怒りを燃やされます。

そして、私たちの罪に対する罰を下されます。

私たちが打たれます。

苦しめられます。

刺し通されます。

粉々に砕かれます。

そして、最後は、永遠の滅びである、地獄に投げ入れられます。

このような神のさばきをまぬがれる道は一体どこにあるのでしょうか。

神のさばきをまぬがれて救いに至る道は一体どこにあるのでしょうか。

それは、イエスキリストです。

救い主イエスキリストです。

イザヤはそれを伝えたかったのです。

彼が言う「主のしもべ」、「受難のしもべ」、イエスキリストに救いがあります。

彼が、私たちの身代わりに神のさばきを受けて下さいました。

彼が、「まことに、私たちの病を負い、私たちの痛みをにない」ました。

彼が、私たちの身代わりに

「罰せられ、神に打たれ、苦しめられ」ました。

「彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれ」ました。

そして、「彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた」のです。

「平安」とは「シャローム」：

神との和解、神との平和な秩序、仲直りした、

もう神さまにさばかれることのない、罪赦され、神さまに愛される関係を意味します。

キリストの十字架の身代わりの死によって、

私たちのすべての罪は赦されて、神さまとの平和な関係に入れられるのです。

天国に行けます。

最後の審判も受けることがない

キリストが受けて下さったので、受ける必要がない、

罪がすべて清算されてしまった

永遠のいのちに与ることができるのです。

6. 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。

しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

イエスさまを信じる者は、イエスさまがすべての罪咎を負ってくださいます。

さばきと呪いを負ってくださいます。

さもなくば、自分で自分の罪咎を負わねばなりません。

ここに集われたお一人お一人が、

イエスさまを信じて、罪咎を赦されて、永遠のいのちをいただいて、

神の栄光のために生きる生涯を生きていかれるよう、主の御名により祈ります。